

太宰治展示室  
三鷹の此の小さい家

太  
宰  
治  
と  
生  
き  
る  
—津島美知子の決意と生涯

企画展示

三鷹の自宅で (昭和16年頃 個人蔵)

太宰と結婚する前の美知子夫人 (個人蔵)

令和4年  
7/29(金)  
～  
10/23(日)

三鷹市美術ギャラリー 太宰治展示室

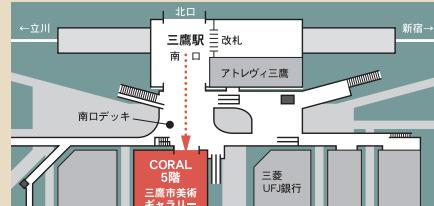
〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 3-35-1 CORAL 5階 ☎: 0422-79-0033

開館時間 10時～18時

休館日 8月1、8、15、22～29日、9月5、8、9、12、20、21、26日、10月3、11～13、17日

観覧料 無料

主催 公益財団法人三鷹市スポーツと文化財団、三鷹市



太宰治(1909-1948)が三鷹に移り住んだのは、昭和14年(1939)9月1日のこと。ここにたどり着くまでの間、生家からの義絶、腹膜炎の鎮痛剤・パビナールの過剰投与による中毒や芥川賞騒動など、混沌とした状態のなかで低迷していました。そんな太宰にとって大きな転機となったのが、美知子(1912-1997)との結婚でした。

美知子と出会ってからの太宰は、公私ともに健康を取り戻しました。作品もユーモアと明るさに溢れた名作を書き連ねていきます。昭和16年に発表した自伝小説「東京八景」には、三鷹の自宅で妻に再起を誓う印象的な場面があり、太宰の家庭への決意が述べられています。

私は、夕陽の見える三畳間にあぐらをかいて、咲い食事をしながら妻に言つた。

「僕は、こんな男だから出世も出来ないし、お金持にもならない。けれども、この家一つは何とかして守つて行くつもりだ。」

今年は太宰治の夫人 津島美知子の生誕110年を迎えました。本展では、太宰文学を後世に残すために尽力した美知子の作家の妻としての決意と生涯と、妻の一人語りや家族をモチーフにした太宰作品に加え、美知子が亡くなる直前まで推敲を重ねた『回想の太宰治』を紹介します。

太宰一家の営みを、「三鷹の此の小さい家」でご体感ください。



石家の人びと 昭和14年元旦

提供:山梨県立文庫

太宰は三鷹に転居前、甲府で新婚生活を開始。美知子の実家の石家を毎夕訪ねるほどの家族ぐるみの付き合いを重ねた。「十五年間」で「幽かにでも休養のゆとりを感じた一時期」と、この頃を追想している。



婚礼写真 昭和14年1月8日

個人蔵

祝言は井伏鱒二宅で執り行われ、井伏夫妻、山田貞一夫妻、中畑慶吉、北芳郎といった、限られた人が出席した。



長女園子の臍帶納 津島家寄託

昭和16年6月7日に三鷹の自宅で生まれた第一子の出生記録を、太宰が小さな桐箱に、毛筆で丁寧に記している。



「中央公論」昭和15年2月

「駆込み訴へ」初出。口述筆記で生まれた三鷹時代の佳品。まるで蚕が糸を吐きだすように淀みなく語る太宰と、それを誤記することなく書き取っていく美知子の姿が彷彿する、仲睦まじい夫婦の共作。



「婦人公論」昭和17年2月

「十二月八日」初出。美知子と思しき主婦の一人語りで、第二次世界大戦勃発の日の出来事が綴られたもの。三鷹に越してきた今官一が登場するなど、戦中における太宰一家の日常が感じられる。



『回想の太宰治』

(左:初版 昭和53年5月、右:増補改訂版 平成9年8月、共に人文書院刊)

三鷹時代の太宰を知るうえでの最重要文献。晩年の美知子は入院中も推敲を重ね、増補版刊行前に天寿を全うした。